サロン

# 白鳥物語三題

6月13日は白鳥大橋の開通式でした。夢から現実へ、そしてこの白鳥大橋の開通で室蘭の新しい時代が始まりました。鉄冷えの街室蘭から多くの明るい話題が出てくることを期待しています。ところで、明るい話題ではないですが、白鳥大橋に関わった特定の人にしか記憶されていないであろう話題を三つ紹介いたします。

白鳥大橋の構想は、昭和30年に室蘭開発建設部の初代部長猪瀬寧夫氏の提唱がスタートと言われている。おそらくこれは事実であろう。ところが、その証拠品が見つからない！地元新聞の元旦特集号に、「私の初夢」と題してこの構想が掲載されたと言われているが、その新聞が見つからないのである。もちろん地元新聞社にも保存されていなかった。室蘭市の市立図書館から最後は国立国会図書館まで行って調べたが…。どのようなことが書かれていたのかは謎である。猪瀬氏は、今の室蘭の発展ぶり（？）をどのように想像していたのであろうか。どなたかこの記事をお持ちでないですか？

「白鳥大橋」誰が付けた名前だろう？昭和40年台前半、工業港湾都市としてさらに発展の兆しがみえるなか、室蘭市において室蘭港横断計画を立て、大学の先生、地元官公庁の幹部らが構成する室蘭環状道路調査研究会で港の横断道路について検討されていた。その会への出席依頼の際に白鳥大橋という言葉が文書に使われたそうだが実物を見たことがない。それにこの文書を作成するに当たって、議論があったはずだと推測するが…。ある方曰く、「何人か集まった打ち合わせの中で誰かが白鳥大橋と呼ぼう言った…」らしい。しかし、誰が、何故、その名を言ったのかは知る由もない。ごく自然に生まれた白鳥大橋という名の由来を聞かれてまともに答えられるのは誰もいない。発名なさった方、説明していただけないでしょうか？

白鳥大橋の橋名板はどこに付いているのだろう？さぞ立派な親柱とモニュメントが…と思っていたが、普通の橋と同じように高欄に取り付けられている。もちろん普通サイズで。でも揮毫は、市長・部長・局長・大臣らがされるのかと思ったら、開通直前に漢字（中学生）とひらがな（小学生）の文字で一般公募をし、入選作品の筆字を橋名板にしたのである。これなら誰も文句は言うまい。ところで、これに接続する高架橋の橋名板も一般公募作品である。ただし、本橋の応募作品で佳作になった人に再度書いてもらったものである。13×48㎝の枠の中にひら仮名で「はくちょうおおはし」の文字数をさらに上回る「はくちょうみなみこうかきょう」と筆で書くのは数段難しいと思われたが、実に上手くまとまっている。これで審査を行ったら、たぶん入選したであろう。また、大橋構造部長が室蘭道路事務所の課長の時、白鳥大橋のパンフレットを作成し、その時の題字に近所の中学生の筆字を採用したと聞いたことがある。それを採用しても良かったのにとも思うが…。密かに毛筆の練習をしていた人もいたのでしょうか？

積雪寒冷かつ強風地域おけるこの長大吊橋の架橋技術は、設計・施工・監督等に携わった者たちの汗と努力の結晶であり、国内外からも高く評価されている。しかし、残念ながら工事に直接関係したこれらの者たちは、その日の晴れ姿を見ることができなかった。建設だけでなく地域発展のためにもどうあるべきか努力してきた担当者らは蚊帳の外に置かれた開通式。技術者としてむなしさだけが残る…。きっと、この話題こそが多くの関係した人の心の奥に、オブラートに包まれて残っていることであろう。

（高橋守人）

これを書き上げたのは6月10日、その後校正作業があったが、その間に大橋部長が他界された。戸島さんと石原さんと天国で大きな橋を架けて下さい。ご冥福をお祈りいたします。（合掌）

＊　＊　＊　＊

表紙右上記号　ＩＳＳＮ　0914－8159　の説明

ＩＳＳＮは、International Standerd Serial Number（国際標準逐次刊行物番号）の略で、逐次刊行物に付与される国際的なコード番号で、ＩＳＳＤ（国際逐次刊行物データシステム）という組織のもとで逐次刊行物の組織や検索に利用されます。

この番号は、国立国会図書館ＩＳＳＤ日本センターより割り当てられたものです。